

甲賀郡甲西町狐栗古墳群
調査概要



1968.3

滋賀県教育委員会

はじめに

タキイ種苗株式会社が、京都長岡にあった農場を本県甲賀郡甲西町に移転する計画をたて用地を求めたところ、用地内に周知の遺跡、狐糞古墳群の所在することがしられた。保存について協議した結果、幹線道路を迂回させノリ面をかえ、大多数の古墳を保存し、環境整備をはかるとともに、保存の至難な数基については発掘調査のうえ、典型的な例を移築することが決定した。

発掘調査の結果、古墳時代後期末葉の古墳の実態が明瞭となり、それが古墳の終末を示す好適の資料であるところから、貴重な学術的成果をうることができた。

ここに、その成果をとりまとめ、概要を報告し、多くの人々の参考に供したいと思う。

滋賀県教育委員会文化財保護課長

仁木捨太郎

例　言

- 1 本書は、滋賀県教育委員会が、タキイ種苗株式会社より1,000,000円で委託をうけ、文化財保護課が担当実施した甲賀郡甲西町所在狐糞古墳群の緊急発掘調査事案の概要報告書である。
- 2 調査は、文化財保護課技師水野正好を担当者とし、発掘調査に当っては奈良國立文化財研究所、立命館大学歴史学研究会考古学部会、滋賀大学日本史研究室の援助をうけ、整理に際しては、奈良國立文化財研究所山伏義貴、西谷正高島忠平、町田真氏、立命館大学黒崎直、中井寅夫、福井清男、丸山竜平、水野和雄の諸氏の援助をうけ、写真撮影については鶴谷裕氏をわざわざわせた。
- 3 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要



緒 過

タキイ種苗株式会社（社長滝井治三郎、住所京都市下京区梅小路通猪熊東入180番地）は、京都府下長岡町に所在する長岡農場が、四周宅地化し、加えて近畿圃場整備計画による高速自動車道が農場内を縦貫するため、滋賀県・甲西町の誘致をうけ、滋賀県甲賀郡甲西町大字針の地に農場を移転することを計画し、20ヘクタールを買収し、着々と実施設計をたて一部造成に着手された。

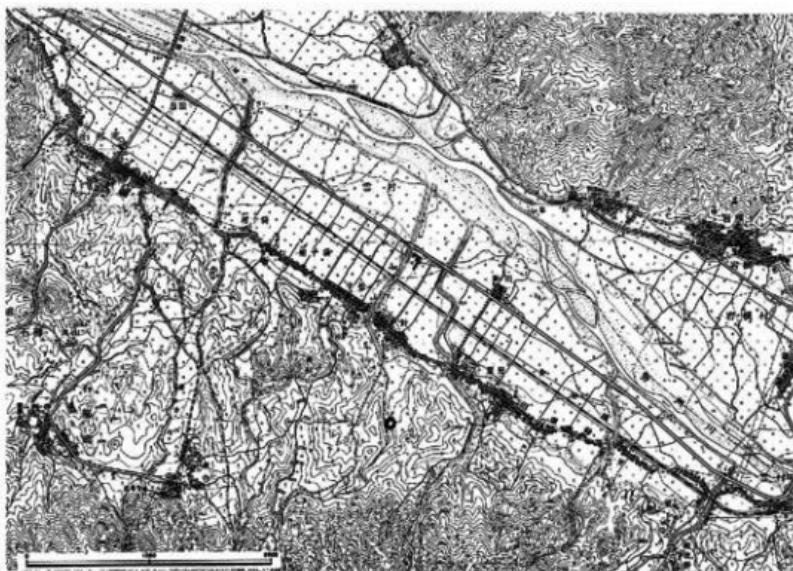
昭和42年5月20日、甲西町教育委員会より同事業の概要、用地内における周知の遺跡の所在が連絡され、昭和42年5月22日、本委員会は同町教育委員会、同町文化財専門委員の同意を得、現地調査を実施した。結果、小字狐栗、山ノ神、八田ヶ谷に古墳群の所在を確認し、小字城山に針城跡と推定される遺構の存在をたしかめた。従って、昭和42年5月28日この事実を同社に通知し、以後再三にわたり保存協議、現地協議がおこなわれた。

結果、当初、狐栗古墳群18基中12基を埋没し主幹道路を敷設する予定であったが、最終的には主幹道路を迂回させて法面を操作することにより13基を保存し得

境整備をはかること、道路下に埋没する5基を発掘調査し典型的な遺構を移集することを条件として両者の協議をまとめた。

昭和42年7月21日、この協議内容にもとづきタキイ種苗株式会社より文化財保護法第57条2項の規定にもとづき土木工事に伴う発掘届が提出され、本委員会も学術調査を内容とする発掘届を提出し、文化財保護委員会の承認を得、昭和42年7月29日より滋賀県教育委員会が主体となり8月10日まで、計44日間を要し調査を実施した。

調査中、新たに2基の古墳を発見したため併せて調査するところがあった。調査は、奈良国立文化財研究所、立命館大学歴史学研究会考古学部会、滋賀大学日本史研究会の援助をうけて所期の目的を達したが、調査後4基を移築することとし、昭和42年9月11日より着手し、9月20日、計10日間を要して終了し、ここに現地での事業を完了した。なお、用地内の山ノ神古墳群、八田ノ谷古墳群については、タキイ種苗株式会社において保存されることとなり、針城跡については土器を補修し活用されることとなった。（水野正好）



(50,000分ノ1・地形図)

位 置

本県の中央に北東から西南に横たわる臨済湖琵琶湖が所在し、その周辺に近江の諸平野が広がり、四周は高い地盤山脈が囲繞している。東側には伊吹鉢鹿の諸連山が連り、その南縁は標高500米から800米をかぞえる高原性山地、信楽山地が走る。この西にのびる山地と平行し、北側に西流する野洲川があり、その間に巾1300米の、次第に西に広がる平地が見られる。野洲川と、水田地帯をなす平地、山麓に東西に点在する集落、深い山腹、そうした風景に彩られる人文的景観が東西にひろがっている。

本汎聚古墳群は、阿星山北東山麓に所在する針集落の後背地、700米の山麓の緩傾斜地に位置するが、阿星山山頂近くより流れでて、針の集落を経て野洲川に流入する針川が、山腹の急傾斜を一気に降り、やや緩傾斜地を少し川幅を広げ西に外寄りしゆるやかに流れ、再び急激に流下し針の集落に出るが、その緩傾斜地の外寄る針川の東岸の崖上平地に立地している。その位置は、針集落の北方に所在する天神山の小山丘西斜面の段下段平地であり、針川の小水流をへだてて西にやや高い壁山の尾根が眼前に腰腹をみせている。平

地は南北120米、東西90米をはかり、北辺は標高162.5米を示しており、北は急激に北方へ、西は同様針川河岸に低下し、南方、東方は天神山に発した高地形となり約3.2米の差をもって高く、この平坦地形が明確にうかがわれる。平坦地全体についてみると、南東から北西に軸を配して、軸線上が最も低く軸線外が次第に高まっており、古墳は大抵この軸線上の北東縁に沿って配置されており、整地形測量の結果、この軸線上に古道が存したのではないかと考えられるに至った。從って本古墳群の北端、針川を通り平地に入る地点に所在する三基の古墳が大きく低下する平坦地間に立地する事実を除けば他はゆるやかな傾斜面に占地するため、二者を区別しうる結果となっている。本古墳群の所在地は、滋賀県甲賀郡甲西町大字針小字汎聚1177、1178、1190～1192、1198～8～3番地に該当し、山体であったが同社の用地化後伐採され、近く農場内の散遊地として整備される予定となっている。本古墳群より更に針川を遡った山ノ神古墳群も38全基が針川東岸の平坦地に占地しており、本古墳群と相俟つて興味ある立地を示している。

（水野正好）



(狹葉古墳群・全量)

古墳群の構成

狹葉古墳群は、南北120m、東西80mをはかる平坦地に占地するが、この平坦地は南東から北西に漸次低くなり、その輪郭が一見浅い谷状を呈しておりその北東端に3,4基づつ、計21の全古墳が配置されている。この谷状の輪郭は針川と斜交しており針川を遡ると自然とこの谷状部分に出るところからみて、自然地形を巧みに利用した道であろうと思定される。この道路様の輪郭は110m南東進して崖部に至るもので本古墳群を連絡する幹道道路とすることができる、その間3.5%前後の勾配をもつことが推察できる。本古墳群の西側を限るこの幹道は、必ずしも墳丘や横穴式石室、木椁の輪郭と一致しないが、このことは幹道路より分岐する支路が存したことを想わしめるのであり、そうした要素を勘案すれば5支路の設定が可能であり、全5支路が北東から南東に通じ幹道にとりつく結果となる。この事実は南東より北西につく幹道路に直交するものであり、正しくは古墳を形成した墳面に巧みにとりつく支路であったことが理解されるのである。

従って5支路により区分される古墳は、それぞれ小支群を構成することとなり、全21基は7支群に分別

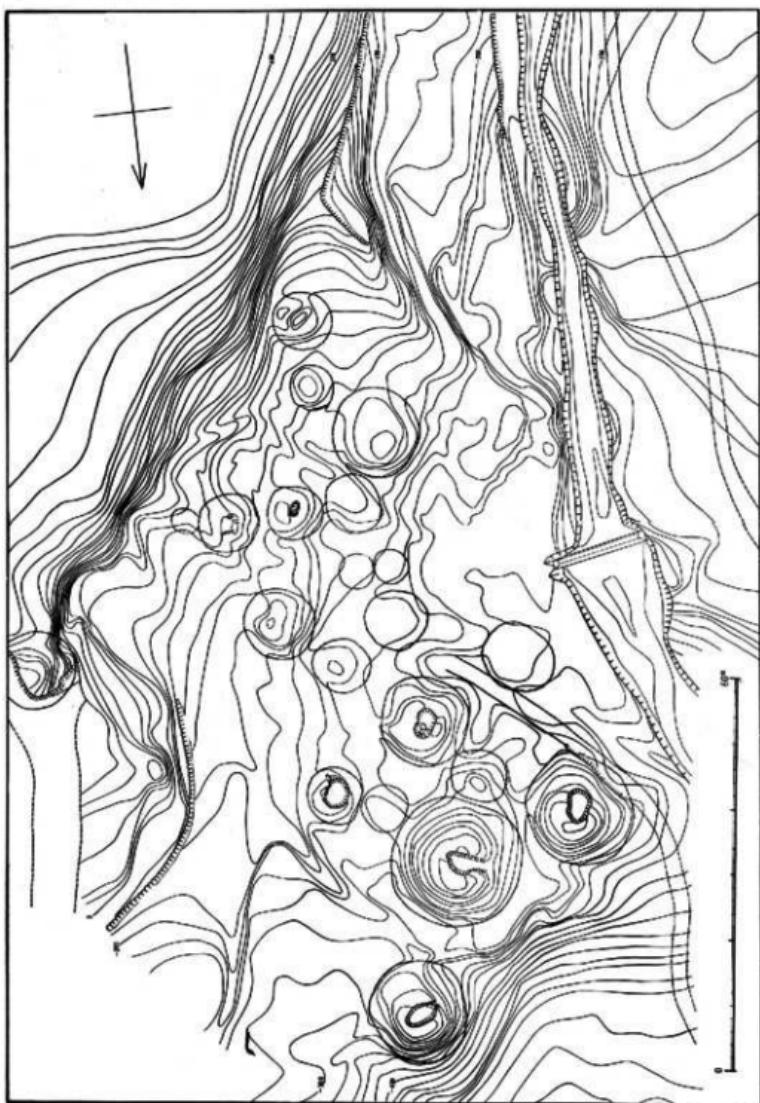
することが可能となる。これら7支群は、構成する古墳の基數、内容、存続期などについて共通性がみとめられ、支群の成立はほど疑いないものと思料される。次に各支群を南より順次検討したい。

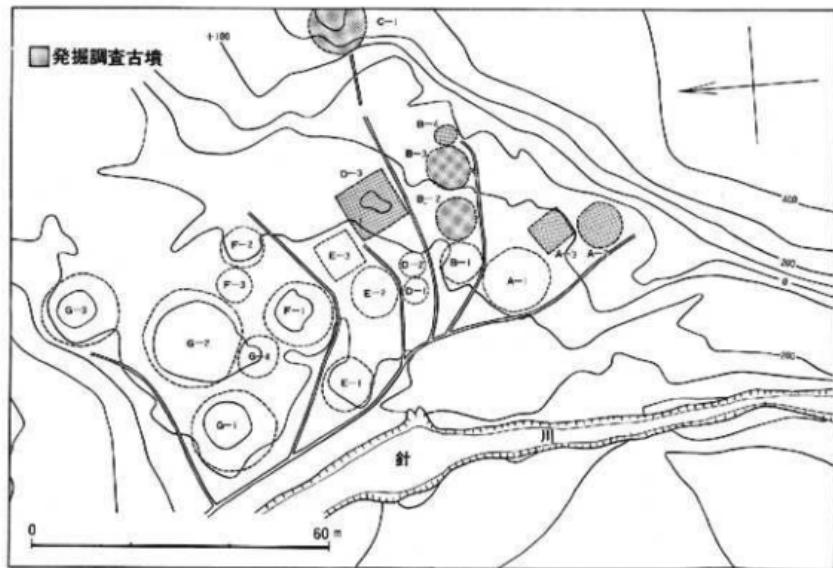
A支群は、本古墳群の最奥部に位置し、3基よりも多い。A 1号古墳は径13.5m以上の円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様で、本文群中最大の規模をもつ。A 2号古墳は、径9.4mの円墳で南西に開口する横穴式石室をもつ。A 3号古墳は、一辺約7.3mの方形墳で南西から北東に軸を配する2基があった。

B支群は、A支群の北方に位置し1基よりもなる。B 1号古墳は幹道路に近くオ調査であるが、径9.1m以上の円墳で横穴式石室をもつ。南に開口する模様で小群中最大の規模となろう。B 2号古墳は径10mの円墳で南に開口する横穴式石室をもつ。B 3号古墳は径9.3mで南に開口する横穴式石室をもつ。B 4号古墳はB 3号古墳の墳丘南側を利用した推定円墳で南に開口する1基収納の横穴式石室をもつ。本文群は墳丘相接し南に東西に走る支道のであること、B 4号古墳遺跡時延長されたことが判明した。

C支群はB支群の東北方の崖状部にあり1基であ

(瓜果古墳群・全城実測図)





(古墳群の構成)

る。崖上に他墳が存した可能性もあるが早く開墾開道されみられない。径14.6米の円墳で最大規模の横穴式石室を西向開口し、D支群の支路を利用する。

D支群はB支群の北方に位置し3基よりなる。D1号古墳、D2号古墳は現状では径5.3米と小規模であるが埋没はげしく恐らく旧規は8米前後であろう。横穴式石室で南に開口する模様である。D3号古墳は本支群の最奥部に位置し一辺約10.8米の方形墳であり南東向きの木棺が存した可能性がみられる。

E支群はD支群の北西に位置し3基よりなる。E1号古墳は径11.4米以上の円墳であり最も幹道近く横穴式石室と思われるが開口方位は不明である。E2号古墳は径9.8米以上の円墳で横穴式石室をもつが南東に開口する模様である。E3号古墳は一辺約9.2米を測る方形墳であるが、内部主体は不明。恐らく南東向きの木棺が埋められていると想定される。

F支群はE支群の北西に位置し3基よりなる。F1号古墳は径13.8米以上の円墳で横穴式石室をもつ。南に開口する模様であり本支群中規模最大と思われる。F2号古墳は径9.0米の円墳であり、横穴式石室を主体とする。恐らく南東に開口するものであろう。F3号古墳は径7.1米以上の円墳であるが石室はみられず木棺直葬の方形墳とすることもできよう。

G支群はF支群の北西に位置し4基の大規模な古墳よりなり主的存在である。平坦地最北端入口部に該当し注目される。G1号古墳は幹道路に接し径17米を測る円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様。G2号古墳は径19.6米の円墳で北西に開口する横穴式石室をもつ。G3号古墳は径14.3米の円墳で横穴式石室をもつ。南西に開口する模様である。G4号古墳はG2号古墳に接し径8.6米以上の円墳であるが木棺直葬の方形墳とすることも可能である。

以上7支群を概説したが、各支群にあっては最奥部、ないしは支路に面する2古墳間背後に木棺直葬の方形墳や小石室をもつ古墳が存し、通常有る横穴式石室をもつ円墳とは自づから異った支群内配置をとり、前者の營造が後者におくれることをよく示している。從って支群内の各古墳が時間的に経過して营造されたことはほぼ疑いなく、こうした点から一支群の背後に一古代家族の存することを推測しうるのであり、墓域を7支群にわかつて記載古墳群の背景には、古墳時代後期、頭界にあっても幽界同様1集落が略7有力家族により構成されていたのではないかと思われ。またG支群がそうした集落を代表する家族の墓域と考えられて、その示す1支群の様相の動きが、また古代家族の時間的なあり方を示すものと考えられ興味深い。(水野)

第 A - 2 号古墳

A-2号古墳は、主軸をN-56-Wにおき南西に開口する両袖式横穴石室を内部に有し、墳丘斜面に外護列石をめぐらした円形墳である。

位置 A-2号古墳は御茶古墳群の中で最も南に位置し、A文群に所属し最奥部に位置する。東から西に下降する斜面に築かれており、今回調査した北側にあるA-3号古墳とは溝をはさんで隣接する。

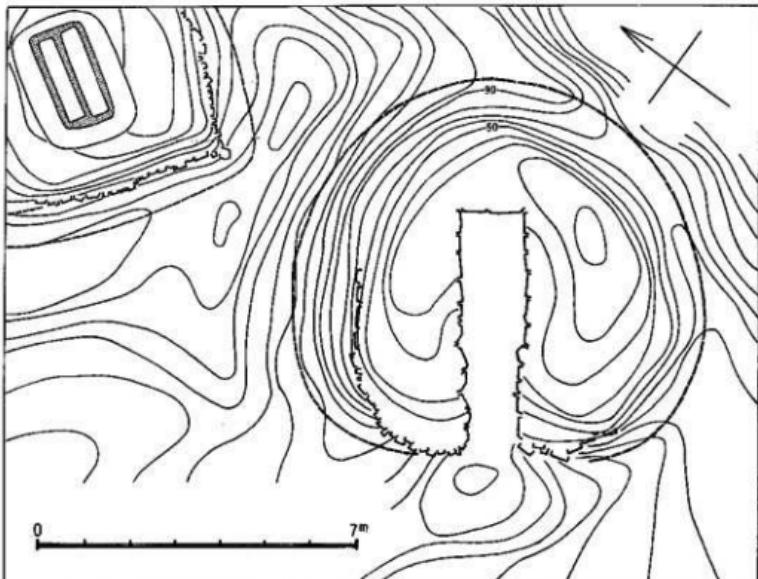
調査以前にすでに盗掘を受け石材が抜き取られていた為、北京から南西方向に大きな被掘痕が見られた。

墳丘 調査以前の墳丘は東西8.9米、南北9米、墳高1.1米を測った。発掘調査の結果墳丘直径は石室主軸方向で9米、直交して10.5米を測り石室主軸方向の直径が短いことが判明した。現墳高は石室入口と北西側から見るのが最も高く1.7米、東から0.8米ある。推定される墳丘の旧堤の高さは約2.5米である。

墳丘築成にあたっては、古墳營造予定地の周囲を若干さげて深い溝を円形に割いている。しかし溝道の入口の左側附近のみ溝を通さず1.2本幅の高まりを掘り残していることが注意される。その後石室構と平行

して墳丘を形成していくと考えられる。盛土は現在最も厚い左側壁部で1.2米あり、附近的地山とよく似た黄褐色～茶褐色を呈し砂を含んだ土で各々40厘米前後の厚さをもつた3層からなっている。最下層には若干の炭化物が混入している。外縁施設としては墳丘側面に積まれた外護列石がある。これは築造部入口に連続して両側に伸びる石積で、保存状況の良好な左側についてみれば、墳丘前面は4～5段積みにし側面にいくに従って段数を減じ左側面では一列になっている。石積上面でレベルをそろえたため側面では斜面中腹に位置することになっている。右側は前面に一部石積が見られるが崩落が激しく凹状を留めない。この列石は前面を意識して築かれており、墳丘後面には存在しなかった。なお笠石、埴輪等の施設は全くみられなかつた。

前方 北東から南西に主軸を置き南面に開口した長方形を示す據方で、主軸に直交する幅は2.70米前後、主軸にそっては5.50米前後を測る。墳の深さは東から西に下降する地形に影響されて奥部が最も深く70厘米





(第A—2号古墳・全景)



(第A 2号古墳・墳丘全景)

次いで右壁部が50匣、左壁は30匣である。玄室部は奥部より10匣深く掘られており、玄室部の床底の周囲は無塗の畳下底石をえるためさらに約20匣掘り下げられている。

石室 主軸をN—S—Wにおき南西に開口する両袖式の横穴式石室であり、全長5.10米を測る。玄室部は奥壁幅1.20米を測り、左壁は袖並に平行であるが右壁は入口に向かうに従って外側へ張り出すため袖石内側幅は1.50米拡がっている。玄室の長さは2.95米であり、奥部の袖石内側では幅1.15米、奥部では1.10米を測る。

奥壁は現在4段目まで、床面から80匣の高さを残していた。第1段目は大形の石を垂直に使用しており左側壁は縦長の石を縦積みし右奥壁には長方形の石を横に積み、この間隔を埋めるために小形の石を横積みし高さをそろえる。その後、確認出来る4段目までやや小形の石を少し内側に持送りながら横積みしている。左側壁は6石をもって玄室部とし、7石目の石を内側に突出して縦積みし袖石としている。2段目から上は第1段目の石の半分にも満たない石を積み、あるいは小口積にしており、わずかに持送りが見られる。右側壁

も第1段目の石で6石目を継積みするなど部では異なるが左右側とも基本的に同じであり、奥部の第1段は玄室とは異り背の高い石を5石継積みする。

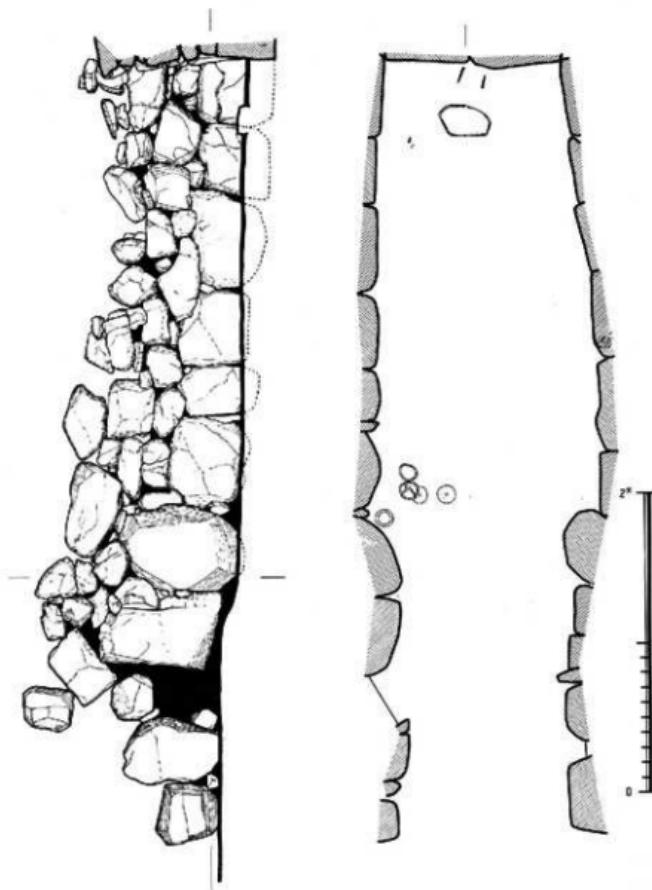
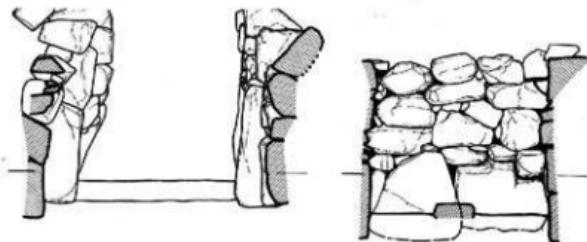
遺物出土状況

石材抜き取りに伴う盗掘によって玄室中央部床面は擾乱を受けており、原位置に存在すると考えられる遺物は玄室部では右袖部に須恵器壺1点(4)、同蓋3点(1~3)、同皿1点(7)を、奥壁附近には鉄釘3本のみをとどめる。玄室部擾乱土からは銀製空玉6、ガラス小玉1、鐵釘數本、土師器壺1点を検出した。談道入口前方1米には供獻された状況で須恵器台付長塚、同高壺各1点を検出し、その他埴丘塚をうめる黒色土層中より須恵器壺2点(5・6)同平瓶、甕等の破片を検出した。

遺物 壺(4・5・6)は最大径11.20~20匣、口径8.0~9.20匣、器高3.40匣を測る内傾した短いたちあがりを持つもの。(4)は底部外側を右まわりのクロで削り窯印を施し、内面中央には一方向のなでが見られる。蓋(1~3)は扁平なつまみと大きなかえりをもつものである。(1・2)は上面に2条の沈線をめぐらす全く同形のものである。皿(7)は、口

(第A-2号古墳・石室)





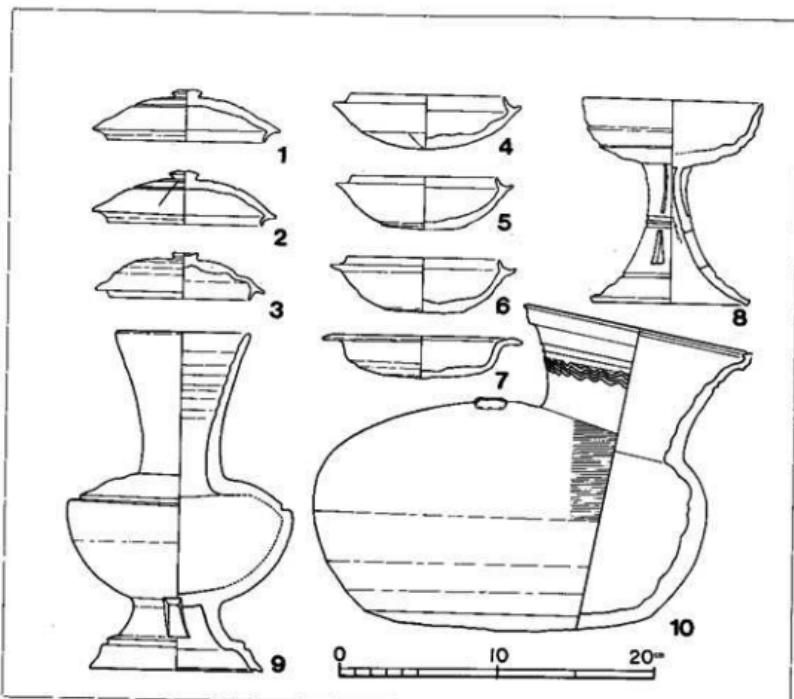
(第A—2号古墓·石室实测图)

径 12.80 毫、器高 2.60 毫を測る口縁部をつば状に外反させたもので底面下面は右まわりのクロでへら削りされている。これら石室内部の上器は内面中央部に一方向のながりがあり、胎上に白色砂を含むなど共通点が多い。高杯(8)は浅い環部と細い頭部からラッパ状に広がる脚からなる。杯部には 2 条の沈線を、脚部には中位と下位にそれぞれ 2 条と 1 条の沈線をめぐらし 2 個 3 方のすかしを穿つ。台付長耳壺(9)は浅い外反する頭部、肩の張った低い体部、屈折して広がる短い脚からなる。肩部脚には 1 条の沈線がめぐり、脚に施された方形すかしは 2 方にある。下半は右まわりのクロでへら削りしている。平瓶(10)は、体部径 25.20 毫、器高 21 毫、口径 15.20 毫を測る。平らな底部をもつ肩の張らない楕円形の体部の肩部の一方に、煽部を屈折させ外反する口縁部を取りつけたものである。頭部中央には 2 条の沈線がありその下に横描波状文をつける。体部上面には 2 個の點七粒をはりつけており、

体部下面は左まわりのクロでへら削りしている。

埴輪者と時期 本古墳石室内に於て検出された埴輪柱釘、須恵器より 2 棚の埴輪が直ちに現れる。しかし 2 棚の配置復原より遺物を何ら伴わないが他にもう 1 席埋葬の可能性が考えられ、2 体以上の埋葬が行なわれたと想定しうる。すなわち石室主軸線上奥壁中央部に頭を接して臥す 1 号棺を、石室主軸に平行し、玄門附近右側壁に接して配する 2 号棺を、2 号棺の反対側玄門附近左側壁に接して存する 3 号棺を各々想定できる。本古墳造営時期については、石室内、埴輪器より検出された土器全てが单一の時期形式を示し 7 世紀前葉と考えられる。

小結 A-2 号古墳は、隣接する A-3 号古墳によって埴丘西縁裾部の小溝を埋められており、また A 支群南端に位置することから、本古墳は A 支群 3 基中第二次に築造されたものであり、7 世紀前葉に築造、被葬されたものらとも考えられた。
(山沢義貴)



(第 A-2 号古墳・実測図)

A-3号古墳の調査

A-3号古墳は、裁頭方錐台基の上に埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり、木浜直界を内部土体としている。

位置 本古墳は、箕輪古墳群A支群に所属し、A支群中央部に位置する。西方のA-1号古墳、南方のA-2号古墳の後背部に溝を接して接造されている。

墳丘 調査前墳丘は、東西径6.40米、南北径6.80米、墳丘高0.85米を測る円墳と考えられたが、後世の堆積土や流出土を除去了した結果、周囲が正しく東西南北を指す、裁頭方錐台基の上に方丘をのせた、平面方形の古墳であることが判明した。

裁頭方錐台基は東北・西南辺7.30米、東南・西北辺6.90米を測る僅かに東北・西南辺が長い方形であり、台基高は東南より西北にむち地形に影響され、東南高25厘米、西北低80厘米と逆戻を示す。台基の形成について

は、地山を一辺7メートルの方形で削し、周囲を僅かに四

め中央高25厘米の地山台基を作り、上部に明茶褐色土層

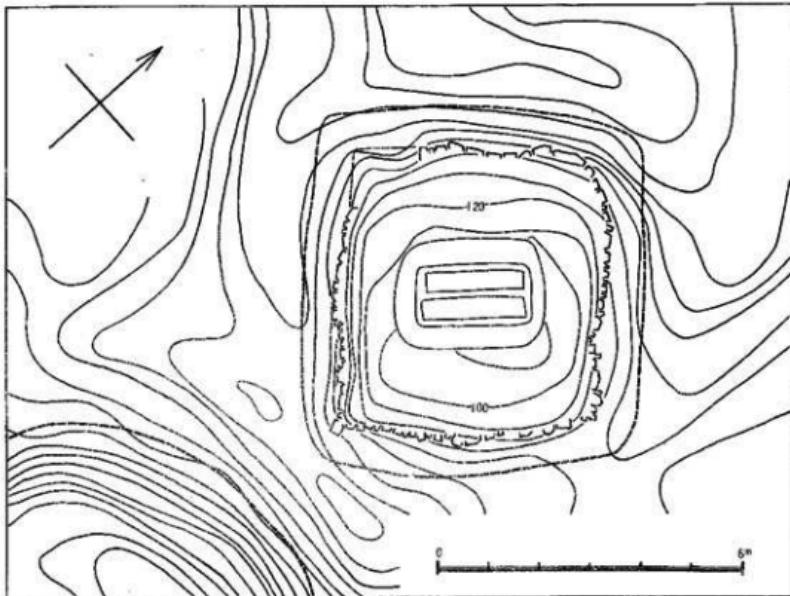
35厘米を水平に積層している。

上部方丘は、台基上に構築され四周を垂直石質で囲

繞した方形の区画であり、東北・西南辺5.75米、東南・西北辺5.80米を測る。現在方丘高50厘米を測るが頂部40厘米が流出していることが知られ、復原高80厘米と想定出来る。現存する石積は西南辺以外最も下段を留めるのみであるが、据部に転落した多量の石材を復原すれば旧貌はおそらく大小の河原石を用いて済底に間を整え5~6段積み上げ、方丘上面にまで及んだものと推定出来る。石積最下段のレベルは地形に影響され、東南辺が高く西北部が低いが上面は水平に整えられたと考えられる。西側は比較的大きな石を川いて積み上げている。上部方丘の形成は水平に築成された台基上面より黒褐色土層10厘米、茶褐色土層40厘米を漸次レンズ状に疊層しており、方丘上面は平坦水平に整えられたと推定され、石積は黒褐色土層中にその基底部を置くことが注意された。

なお、台基・上部方丘・頂部全面を調査したが周濠や墓石・埴輪等の外部施設は認められなかった。

埋葬施設の配置 現墳丘表面より約5厘米厚の腐鰐土を除去すると直ちに方丘盛土となり、この方丘盛土面



(第A-3号古墳・墳丘実測図)

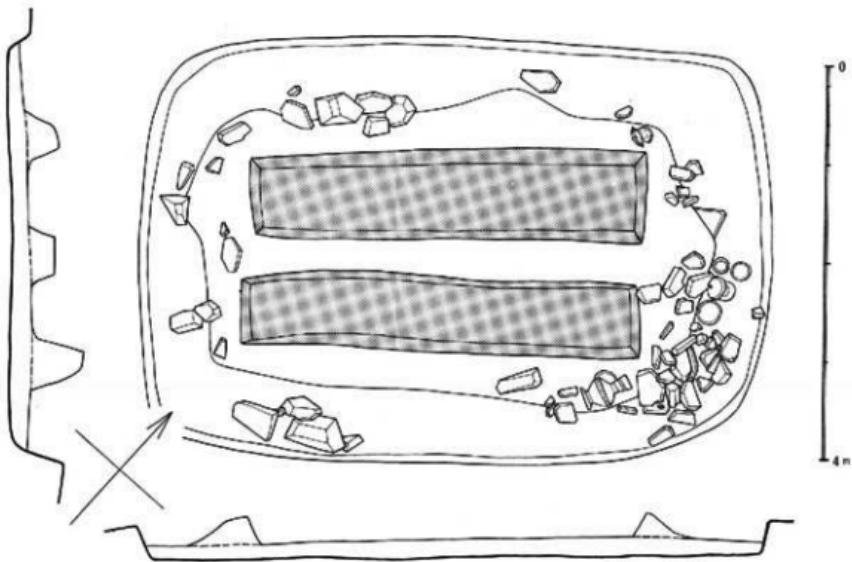
において検討した結果、同一墓壙内に2基の埋葬遺構の存在を確認した。墓壙は上部方丘中央部に位置し、主軸を台基・上部方丘のそれと同様東北、西南に配し全長3.80米、東北端巾2.10米、西南端巾2米を測る隅丸の長方形である。残存深さ約50厘米を測るが、台基部までは及んでおらず、旧復はおそらく80厘米の深さを持つ墓壙と推定された。墓壙内には陶質土器9点を伴い墓壙主軸同様東北、西南に主軸を持つ第1号、第2号木棺を安置している。第1号、第2号木棺の埋葬方法は方丘中央部に広闊な墓壙を穿ち、厚約10厘米の粘土層で墓壙内を旅籠整備し、2木棺を並置し、その間の空間に河原石を頭部には密に、足部には粗に敷き献供用陶質土器を配している。そして再び粘土で木棺の四隅を覆っているが、それが宜上辺にまで及び木棺全体を覆ったかは確認出来なかった。その後、墓壙内に若干の土を投入しながら、墓壙端まで水平埋戻作業を実施している。埴丘頂部におけるかような2埋葬遺構の検出に伴い、発掘区を埴丘全面に拡大し、精査したが、根部に至るまでに他の遺構の存在は認められなかつた。

埋葬遺構と葬具 第1号遺構：方丘中央部に穿たれた前記の墓壙東辺より50厘米の距離をおき、辺に平行して設けられた埋葬遺構である。第1号木棺は全長2.

07米、北東端巾39厘米、西南端巾35厘米を測る平底、直壁の箱形組合式木棺の制にならうものであろうが、底壁ともわずかの丸朱を持ち込みたい。棺底は東北端が8厘米高く、棺幅の広狭と共に遺体が北枕に臥したこと窺いえた。棺高は、現在35厘米を測るが、以上は平夷され不明である。棺内よりの遺物の検出はみられなかつた。

第2号遺構：第1号木棺と同一の墓壙内西辺に平行して設けられた埋葬遺構であり、墓壙西辺、第1号木棺との距離は各々55厘米、20厘米を測る。検出された遺構は、全長2.05米、東北端幅45厘米、西南端幅40厘米を測る平底、直壁の箱形組合式木棺であろうと推定されるが、第1号木棺の所見と同じく断定出来ない。棺底は東北端が5厘米高く、棺幅の広狭からも第1号木棺と同様北枕の葬位をとったものである。棺高は25厘米まで迫りえたが、以上は全く平夷され、確認しない結果となつた。木棺内部よりの遺物の検出は全く認められなかつた。

前記の如く、第1号木棺、第2号木棺はいずれも同一墓壙の東、西辺に平行して配されたものであり、2棺の棺底も同じく縦上に成層された約10厘米厚の黄色粘土層上に配されている。その上墓壙主軸線上東北端において底面と同一レベルに置かれた供獻用陶質土器数



(第A-3号古墳・内部主体)



(第A—3号古墳・全景)



(第A—3号古墳・内部主体)

点が検出されると共に、2木棺が同一の粘土で覆われており、2棺同時埋葬が想定しうることになった。

遺物出土状況 A-3号古墳横坑内に係る遺物は、上部方丘墓壙内9点、墓壙上面1点、墳丘南西斜面5点計陶質土器15点を数え、その他遊離土層より埴質、陶質上器片若干数を数えた。

上部方丘墓壙内の遺物は、耳蓋1点(1)、环身4点(4~7)が蓋壙主胎管上東北端に一括しておかれまた台付長頸壺1点(14)、环身1点(8)が第1号木棺東隅に接し、环身2点(2・3)が第2号木棺北隅に接しておかれたり、木棺に接する4点は木棺を覆う粘土中に完全埋没し倒位、横転位に存した。蓋壙上面より検出された遺物は陶質形土器であり方丘中心部附近黒土層中に灰片となって存し一部墳丘西南側に散在していた。復原すれば1個体を示し、正しくは方丘部一蓋壙中心部上面におかれていたものと考えられる。墳丘西南斜面より検出された遺物は高環形土器1点(9)、平瓶形土器2点(10・13)、注口上器1点(11)、横腹形上器1点(12)であり、すべて破片飛散して出土したが、正しくは西南辺近部に一括配されたものと考えられる。埴質圓形土器の側片1個体分、陶質環形土器の破片が墳丘北端に、後世埋土した黒土土層中より検出されたが、旧位置は判明しない。

遺物 环蓋形土器(1)：口径9.8厘米、器高3厘米を測り全体形つまりを持ち、受部を作り出した小形型のものである。上面は鋸削りされ、胎土中に白色砂粒を含むが、焼成堅密である。

环身形土器(2~8)：环身は蓋受けのあるもの(2~4・6~8)とないもの(5)に区別出来、蓋受けのあるものは口径11.6~10.2厘米、器高3.0~3.1を測り低い蓋受けを持つ小型のものである。粗糲な仕上げで鋸削りも充分行なわず、灰黒色を呈し焼成堅密である蓋受けのないものはII径9厘米、器高3.2厘米を測る小型のもので側方にひずんでいる。底部に鋸削りを有し、胎土に白色砂粒を含むが焼成は良い。上記の环蓋(1)とセットである。

高環形土器(9)：口径11.8厘米、环高4.2厘米、脚高8.2厘米を測る。环腹部に強い稜線1条、脚に2条の凹縫を付し、脚端部は大きく外反する。胎土巾には白色砂粒を含み、内外黒色を呈している。平瓶形土器(10・13)：口径5.5厘米、脚径14.7厘米、器高13.3厘米を測り、口縁は外反せず無文のものと、口径7.7厘米、脚径15厘米、器高13.3厘米を測り、II脚外反し沈線1条を付するものがある。共に底部に鋸削りを有し胎土に白色砂粒を含むが焼成良好灰黑色を呈す。注口土器(11)：口径

部約10厘米、高8厘米を測り口縁部は鋸く立ち上り外反する。底部は径7.4厘米、高5.3厘米を測り2条の沈線を脚部に綴らしその間に刺突文を施す。径1.5厘米の注孔を脚部に1孔穿り、鋸削りは認められない。口縁と底部を損している。横腹形土器(12)：口径6.8厘米、脚部径15.9厘米を測り、底部を損するが器高17厘米と推定出来る。口縁は緩かに外反し、非常に薄く器皿を密である。

台付長頸形土器(14)：口径8.4厘米、脚部径15.4厘米高21.8厘米、脚部径11.6厘米、高4厘米を測る。如脚部に大きく外反する又厚壺を付し、底部に3条の凹縫、蓋壙部に2条の凹縫と刺突文を有し底部にハケ目凹下筋にハラ削りを行なう焼成よく灰黒色を呈す。

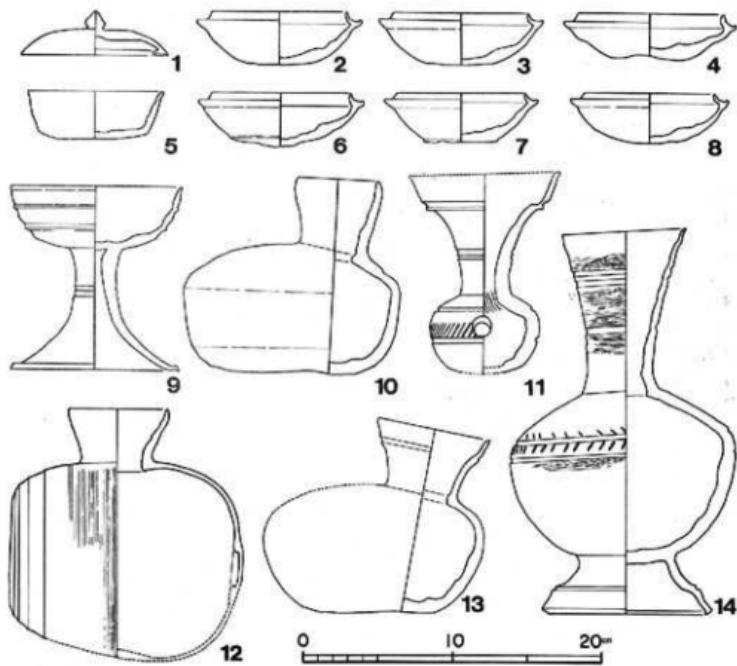
以上の陶質土器は同一時期の形態に伴うものではなく2形式に区別出来る。即ち环蓋と环身(1・5)の1セットは他の土器群よりも1形式時期の下るものであり、古い形式の土器群は7世紀前半、新しい形式の土器群は7世紀中葉に各々位序づけられる。

被葬者と時期 本古墳において検出された2基の埋葬構造は、墓壙の規模、位置等より同時に埋葬の事実を示し、第1号、第2号木棺の被葬者は同時、同墓壙に異名合葬せられたものとなし。と共にまた、本墳营造の契機となったものであることも證めたまない。その上、他の木棺直葬墳に多く見られる遺物の事実は全くこれを認めず木棺、葬られた者は前記の二者に終始したものと考えられ興味深い。

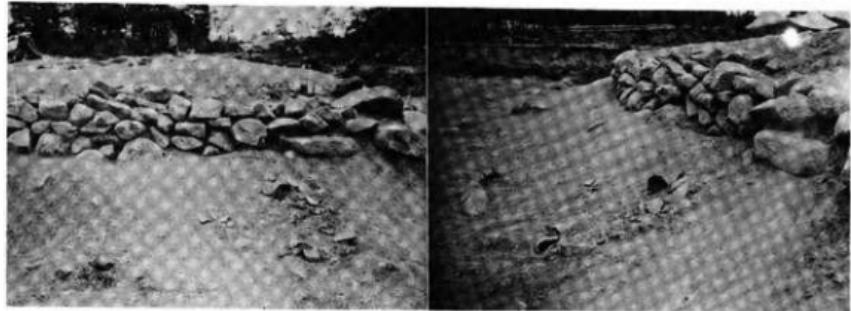
木古墳营造の時期については、墓壙内より出土した陶質土器の示す時期に位置づければ良いのであるが、前記通り同一墓壙内より若干時期の異なる2形式の土器が出土している。しかしながら、形式の異なる2形式の土器が同時一括埋葬されたことは明らかであり、当然木古墳营造の時期は形式により新しい土器群の示す時期、すなわち7世紀中葉をあてたい。前記の如く第1次埋葬後、第2、第3次追葬は行なわれず、本墳は7世紀中葉に行なわれた1度の埋葬のみでその役目を終了したものと考えられる。

小結 A-3号古墳はA-1号古墳、A-2号古墳营造時に各々形成された壙部平坦面上に南北・東西斜面を重ねて構築されており、A支序では最も遅く营造されたものである。墳形も最頭方兼台基の上に、埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり、他の円墳とそのおもむきを異にする上、内部主体も木棺直葬の構造を持ち横穴式石室とは自づから異なる。A支序中第二次营造に係る本古墳と7世紀前半营造の2基間に各種の差異が認められ注目をひいた。

(黒崎 康)



(第A—3号古墳・遺物出土状況)



第B—2号古墳

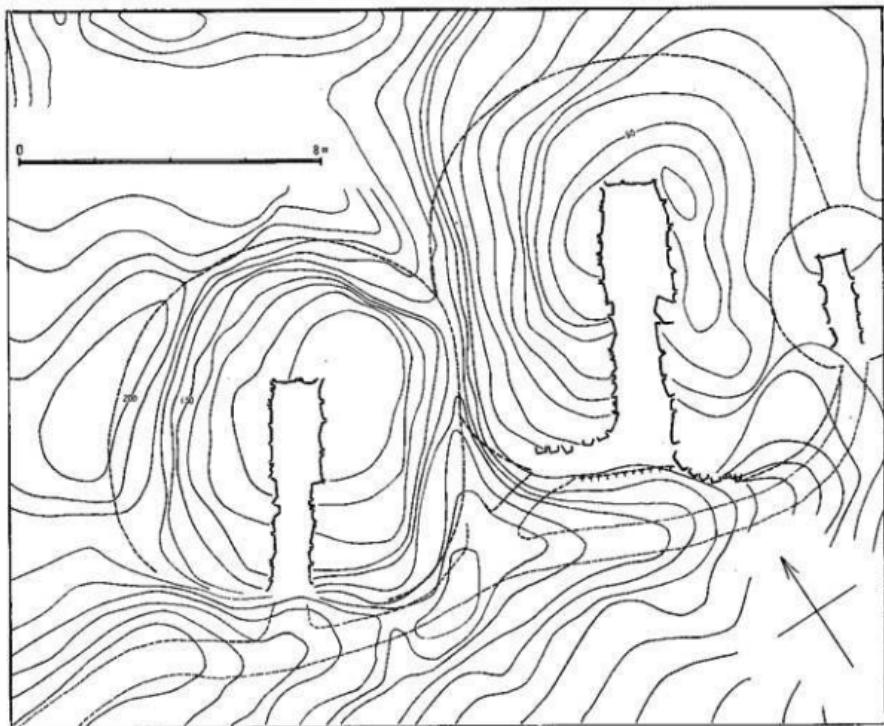
B—2号古墳は、主軸をN—24°Wにおき南北に開口する両袖式の横穴式石室を主体部とし、墳丘斜面下段に外護列石をめぐらした円形墳である。

位置 本古墳は4基からなるB支群に属し、東頭緩斜面尚方に発掘調査を行なったB—3号古墳の西側にはB—1号古墳が所在し、その間に後に割り込んで營造されている。

墳丘 調査前の墳丘径は東西8.7米、南北7.2米、墳丘高は旧地表の影響を受けて斜面下方にあたる西裾で1メートル・北裾で45センチ・南裾で仰掘・東裾で10センチを測る。発掘調査の結果、墳丘径は南北11.2メートル、東西10メートルあり石室主軸方向に長い横円形平面を示す。墳丘高は西裾で1.5メートル・石室入口前方から1.8メートル・奥壁後方から90センチ・東裾で90センチを測る。推定正面高は約3メートルである。

木古墳の營造時には既にB—1号古墳が存在している模様であり、A—2号古墳、B—3号古墳でみられ

た墳丘築造時掘穿する墳丘を全削した溝ではなく、石室の南北両側に山2メートル、深さ30センチ前後の弧状の溝が設けられたようである。その後、石室築造と墳丘盛土が交互に行なわれた。盛土は現在中央部で約80センチ残存する。これは40センチ前後の2層からなり、下層は明褐色土、上層は茶褐色土である。下層上面は石室底面下底石上面レベルにそろえる。外部施設としては本古墳とB—1号古墳の間にある隆起部と外護列石をあげることができる。前者は石室入口に左方5メートルにあって、3×2.5メートル、高さ50センチを測り、墳丘に縱く高まりで大小の石が上面に配されている。隣接B—1号古墳に作るものか、あるいは兩古墳をつなぐ施設であるのか、その性格は不明である。外護列石は糞道入口両端から始まり、左側は一列に並べた石列を前面から側面まで確認した。右側は判然とはしないが、残存する石列は側面途中まで完全に続っていない。



掘方 本古墳はA-2号古墳・B-3号古墳にみられるような石室規模全体を掘り下げた長方形掘方は設けていない。本墳では東から西に傾斜する旧地表の高い部分、即ち奥壁と右側壁部分のみ10-20cm L字状に掘下げ石室床面レベルをそろえる。その後、石室最下底石を安定させるために浅い溝を予定する石室に合わせて掘方の両側壁、奥壁ぞいに掘ったものと考えられる。

石室 主軸をN-24-Wにおき南西に開口する両袖式の横穴式石室である。全長5.85mを測り、規模は小さい。玄室長2.65m、奥壁高1.2mあるが、奥壁に接する両側壁第1石をやや外にひらげて1.4mとし、第2石から袖石内側まで平行にそろえ、この巾を保っている。袖の出は右が大きく35mm、左は16mmである。羨道は長さ2.7m、袖石巾90mm、入口に向うにしたがってやや巾を増し羨門で約1.1mを測る。天井石と側壁上半は既になく、現状では一部3段目まで、高さ1.1mをみるとすぎない。

石室架構方法は規模は小さいが、石の使い方はB-3号古墳石室とよく似ている。奥壁は最下底石に大形の2石を使用し、左側には略長方形の石を横にたて、右側は前者より大きい石を横積みする。この隙間を埋めるために小石を横積みして高さをそろえ、その上に

第2段目の石を横積みしている。奥壁はごくわずかであるが持送りがみられる。左側壁は石を横積みにして玄室とし、大型の石を内側に出して横積みして袖石とし、3段目で袖石の高さまで積んでいる。右側壁も基本的な相違はみられない。羨道両壁においても、小石を用いるはか同様である。側石は最下底石から少しづつ持送りがみられる。

玄室内部には第2次床面下5層に当初の床面が認められた。玄室内部の施設として棺台がある。玄室中央部左側よりに自然石を配した棺台と考えられる遺構を検出した。これは奥壁側に65mm×30mmの石を軸筋に直交しておき、玄門側に30mmの間隔をおいて小形の2石を大石に平行してならべさせたものである。平らな床面におかれているから奥の大石の方がレベルの高いのは当然である。

遺物出土状況 本古墳の遺物は旧状をよく保っており、石室内部、羨道入り口前方の溝から検出した。これらの遺物は出土した位置関係から、第一次埋葬にかかるものとして玄室に一群、第二次埋葬のものとしては玄室に三群、羨道に一群を確認した。前述したように玄室床面は二次であり、第一次埋葬時の陶質土器の环・壺蓋・高耳蓋は玄室袖石内側、下層の床面から出土した。第二次埋葬に伴う遺物群は全て上部床面上にあ



(第B-2号古墳・石室)

る。奥壁付近には陶質土器不・坏蓋・短頸壺・平瓶などと、玄室中央よりの沿台附近には多数の鉄釘、玄室右袖口内部には陶質土器不・短頸壺、矢道袖口附近には鉄釘と陶質土器片を若干確認した。

遺物 第一次埋葬時の遺物不身(14)はやや予たいた底部から外傾した後、屈折して上方に伸びて顶部にいたるものである。端部はくの字形にまがる。底部はロクロによるヘラ削りをほどこす。薄手、精巧な作りである。(3)は最大径12mmの底いたちあがりをもつもので、底部はケズリはない。坏蓋は2種類あって(10)はつまみを持たないヘラ削りされた頂部と、かえりをもつロ縁部からなり坏(14)とセットをなす。

(2)は11径11.4mmを測る平らな頂部から内側して端部にいたるもので、上部はヘラ削りをほどこす。高坏蓋(1)は右まわりロクロでヘラ削りされた頂部に中央の凹んだ小さなつまみをつけ、口縁部との境に浅い段をつける。

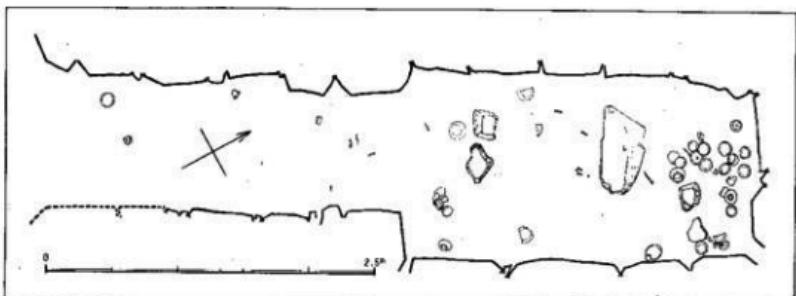
第二次埋葬時の遺物坏(11~19)は、口径8.5~9.5mm、器高3.5~4.5mmを測るほぼ平らな底部とまっすぐ外に開くロ縁部からなる小形の器である。このうち底部を右まわりのロクロで削ったもの(11~15)と削らないもの(16~19)がある。蓋(4~9)は最大径9.4~10.5mm、器高2.2~3.0mmを測る宝珠形のつまみを持ち端部にかえりをもつものである。受部とかえりとが水平なものが多いが、(9)はかえりが内側下方に出ており、つまみも乳頭状を示す。これらの蓋は上面のみ灰白色を呈し、身とともにセットをなして正常位に施かれたものである。高坏は2種類あって、2条の段をめぐらした浅い环部と脚長い脚をもつもの(20)と、深く大きな环部に太く短い脚をつけたもの(21)がある。短頸壺(22~27)は平らな底部と、やや

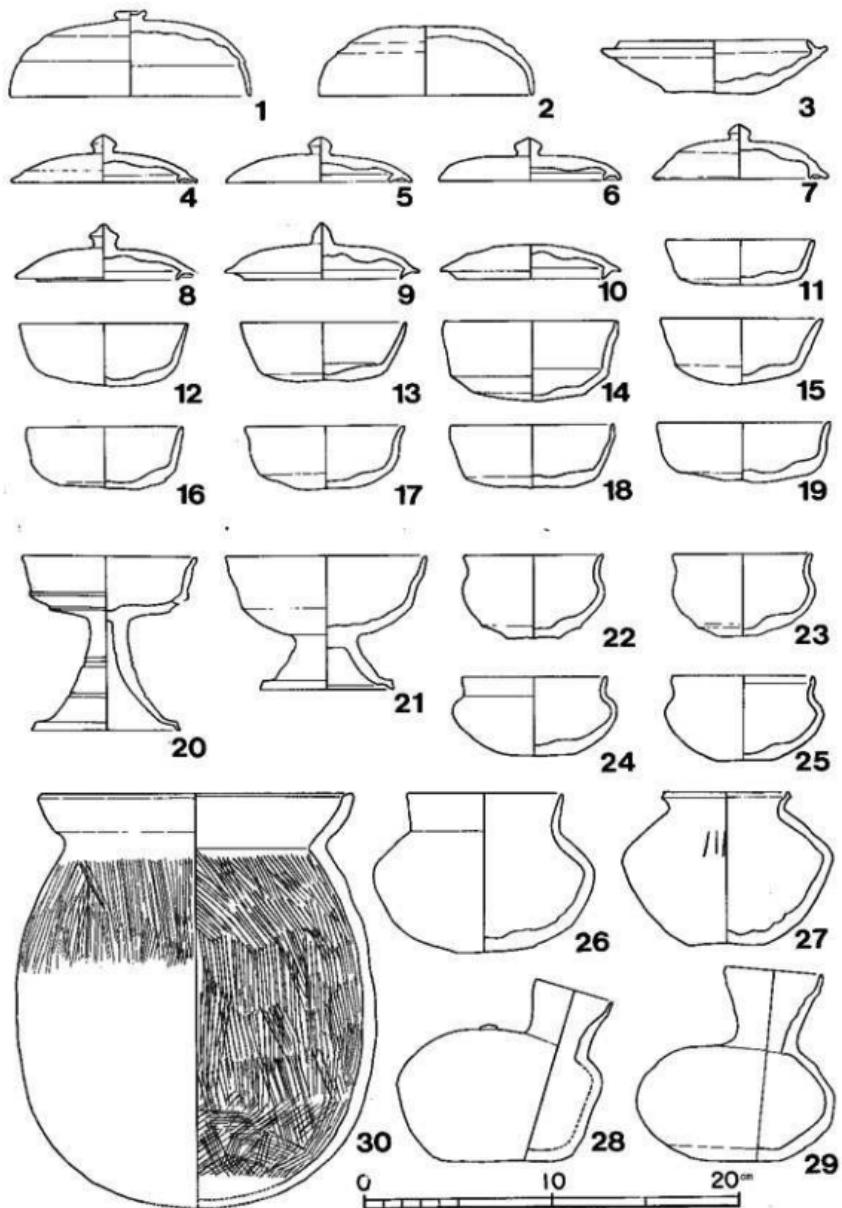
肩の張った肩部、上方にたちあがる広口の頸いり頂部からなるもので大形のものと小形のものがある。(27)は肩の張りがよく11径も小さく他と形態を異にしており、肩部に縦二条の沈穿がある。小形のもののうち、(24, 25)は底部にヘラ削りを施す。提樋(28, 29)は、極小化した小形のもので、(28)の体部上面には2条の直線があってその間に小さな沿土柱を1個張り付けている。埴輪土器蓋(30)は楕円形の体部と屈折してやや内側する口頭部からなるもの。体部外面は上半部に縱方向にハケ目、下半部はヘラ削り、内面にはハケ目がみられる。鉄釘は断面0.4mmの四角形を呈し、長さ7.6mmを測るものである。

被葬者と時期 棚台を兼ねて直接埋葬状況を示す遺構はなく、遺物の出土状態から推定せざるを得なかった。埋葬された遺体は玄室の巾に規定されて主軸に平行して置かれたのである。第一次埋葬界にともなう遺物は大部分が次の埋葬時に取りかたずけられたようであるが、玄室出口側に残された七器類からここに当初の1着が想定される。東壁附近の上層床面の土器群は鉄釘とともに三石でしつらえた棚台上の遺体とともにものとみられ、右室東側等腰に1枚、炭道部に1枚計3枚が第二次埋葬界と考えられる。本古墳の营造の時期は、B-3号古墳とその重複関係から相対的にはB-3号古墳築成以後にもとめられ、遺物の形式から7世紀前葉に位置づけられる。第二次埋葬は陶質土器坏身、蓋などの形式からみて7世紀中葉であろう。

小結 B-2号古墳の東裾はB-3号古墳の南裾の上に重複して集成されている。本古墳は玄室内に床面を二枚持ち、第一次床面より7世紀前半の陶質土器、第二次床面より7世紀中葉の遺物が出土し、少くなくとも4体以上の葬葬が考えられる。(山根義貴)

(第B-2号古墳・石室平面図)





(第B—2号占墳・遺物実測図)

第B-3号古墳の調査

B-3号古墳は主軸をN-21-Wにおき、南西に開口する両袖式横穴式石室を内部主体とし、墳丘前面に外護列石をめぐらした円形墳である。

位置 本墳は古墳群中央部南東にあって、4基からなるB支群に所属する。B支群の古墳は東から西に下降する斜面に構築されており、本墳はこのうち斜面上方にあるB-4号墳と、下方にあるB-2号墳とに墳丘を相接して構築している。墳丘中央部は調査以前石材の搬出があり、南北方向に盗掘痕が見られた。

墳丘 調査以前の墳丘は東西9.50米、南北9米、墳高0.75米を測り、東側部は土砂の流入のため墳頂部より逆に15cm高位を示した。発掘調査の結果、墳丘東、西両幅とも隣接するB-2号、B-4号古墳築造の際に削除され現在正確な墳丘規模は知りえないが、復原すれば、東西径10.5米、南北径13.8米を測り、石室主軸方向に少しひずんだ円形であると想定しうる。現在墳高は東から西に下降する地形に影響され差異を示し西方1.40米、石室入口前方1.20米、石室後方50cmを測る。東側部はB-4号古墳主体部が構築され墳高は不

明である。墳頂部1.40米が流失していることが知られ復原高2.80米と想定出来た。墳丘築成にあたっては、古墳築造予定地選定後、墓壙掘り下げと相前後して地山に巾2m前後、深さ30cm前後の周溝をめぐらして、高60cmの円錐台状地山台基を形成する。その後地山台上に石室築造と関連して盛土を行っている。盛土は現存80cmを測り地山台と類似した黄褐色土をレンズ状に積層しており、疊々多く含む下層と、より少ない上層との2層に区別でき、各々40cmを測る。

外部施設としては、石室入口両端に始まり、墳丘西に沿い左右に伸びる外護列石がある。列石は20塊の大石を用いて高く40cmの斜面を水平に配されている。現在、左側には5石をもって一列に並べ、右側は一部4段構みにして横へ2mまでのばしていることが知られる。この列石は、入口前面部を意識して築かれており墳丘側面及び後方部には存在しなかった。墳丘側面の調査の結果、菟石、埴輪等の設置は全くこれを認めなかった。

掘方 北東から南西に主軸を置き、南西に開口した

(第B-3号古墳・全景)



長方形を示す掘り方で、主軸方向に沿い全長8.40米前後、巾3.30米前後を測る。礎の深さは東から西に下降する地形の影響を受けて、右壁部が最も深く65厘米をはかり、ついで奥壁部が44厘米あり、左壁部はわずかに5～10厘米をはかるにすぎない。墳底部は平坦であるが、奥壁部が低く渓道入口部に向かって、やや高くなり、その差は約10厘米を測る。墳底の周縁は、最下底石をすえるために、一段下げられているから、墳底面の横断面はベッド状を呈している。

石室 主軸をN=21-Wにおり、南西に開口する両袖式の横穴式石室であり、全長は7.35メートルを測る。玄室部は奥壁巾1.50メートルであるが、左壁がやや中ぶくらみに右壁はななめに、共に巾を増しており、玄門部では巾1.80メートルを測る。玄室長、袖巾とも左右に差が認められ玄室左側2.95メートル、右側3.15メートル、袖巾左側15厘米、右側30厘米を各々測る。渓道部は前線に対してやや右側にふれ、入口に向かうに従って、巾を広げており、渓門部巾1.20メートルを測る。渓道部においても左壁と右壁でその長さに相違がみられ、左壁は3.35メートル、右壁は4.15メートルである。従って、渓門部では右壁が80厘米外に出ており注意を引く。恐らくB支群南側を通る墓道が、墳丘左方

より斜めに西南裾をかすめ、東方（主軸直交方向）に伸び渓門部に取りつく結果この右側壁突出部が墓道正面として意識されたものと想定される。このため、石室外方は東西3.6メートル、南北0.9メートルをはかる方形の平坦な前庭部となり、墓道とは異なる機能が推定できる。

奥壁は現在第下段2石を留めるのみであり、長方形を呈する大小2枚の石で構築され、右側は背の高い石を積み、左側は若干小形の石を配している。石室架構の際、石室の長さを決する袖石と共にまずこの2石をすえ、石室巾を決定したことが知られる。左側壁は奥壁より第1石目を大形石で積み積み、第6石目を15厘米内側に出し袖石としている。その間奥壁や袖石とレベルをそろえ2段積みしている。右側壁は左側壁の所見と同様であるが袖石が大きい。渓道側壁は大小の石を積み、凹凸を袖石のレベルにそろえ第1作業面としている。右側壁では小型の石を小口積みしていることが注意された。なお床面を精査したが、排水施設は認められなかった。

遺物出土状況 石材抜き取りの際、玄室中央部床面は相当擾乱をうけているが、原位置にとどまると考えられる遺物は、玄室に2群、渓道に2群、渓道入口前

(第B-3号古墳・石室)



方の墳丘斜面に1群、計5群を検出した。そのほか墳丘をまわる溝の中から若干の墳頂、陶質土器片の出土をみた。

玄室奥壁附近A群には須恵器环身5、同环蓋1、金環1、玄室左袖内側B群には須恵器环身2、同短頸壺1、土師器壺1、差道部右袖部C群には須恵器短頸壺1、同長頸壺1、袖右より約1米人口よりD群には須恵器环身1、同环蓋1、同鉢1、鉄鋸1、差道入口前方E群には須恵器双耳壺1、同短頸壺1、土師器壺1を確認した。

遺物 环身(3~12)は、口径8.90~9.60厘米、最大径10.5~11.4厘米、高さ3.20~3.70厘米をはかる丸い底部と内傾した低い立ちあがりを持つ小形化の著しいものである。底部はヘラ削りしていない。(5)は器高の一倍大きなものでたちあがりもほかにくらべてやや高く、受部が大きく外に出るなど、ほかのものと構相が異なる。胎土中に白色砂粒を含み施成は良い。环蓋(1, 2)は丸い頂部と垂幕に近くおりる短い口縁部からなる小形のもので、頂部は削りを施さない。鉢(13)は斜置する口縁端部を内側にまげたもの。長頸壺(14)は肩の強った平底の制部に外反する細長い頸部をとりつけたもので、頸部中央と肩部にそれぞれ2条の沈線をほどこし、底部と制部下半は右まわりのロクロで削る。短頸壺は大小2種あって小形の(17)は丸い胴部から垂幕に立つ口縁にいたるもので、ロクロ目がよく残っている。底部は削っていない。(15)は平らな底部と肩の張った胴部、やや外反して制部が内側に折れる口縁部からなる。制部中央に1条の沈線があり、制部下半から底部にかけて右まわりロクロで削る。双耳壺(15)は、下方に張りのある丸い胴部からゆるく内寄しながら端にいたるもので、頸部両側に粘土紐を準拠した耳をつけている。金環は銅芯を金箔

で覆った通有のもので、長径2.76厘米、断面は長径0.76厘米の梢円形である。

被葬者と時期 石室において木棺・棺台・棺封等埋葬状態を直接示すものは認められないが、供獻の状況を示す須恵器の出土状況からそれを推定できる。

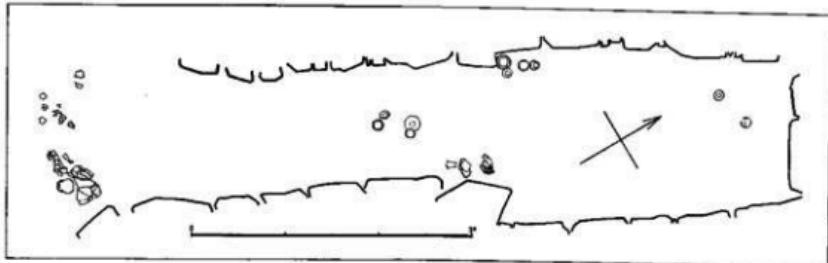
前記の如く石室内には、須恵器を中心とする4つの遺物群が認められ、これによりA群に伴なう埋葬を玄室中央部奥壁より1格、B群に伴なうものを玄室内部袖部より差道部にかけて1格、計3格が復原でき、3体以上の埋葬が本石室内に行なわれたことが想定された。

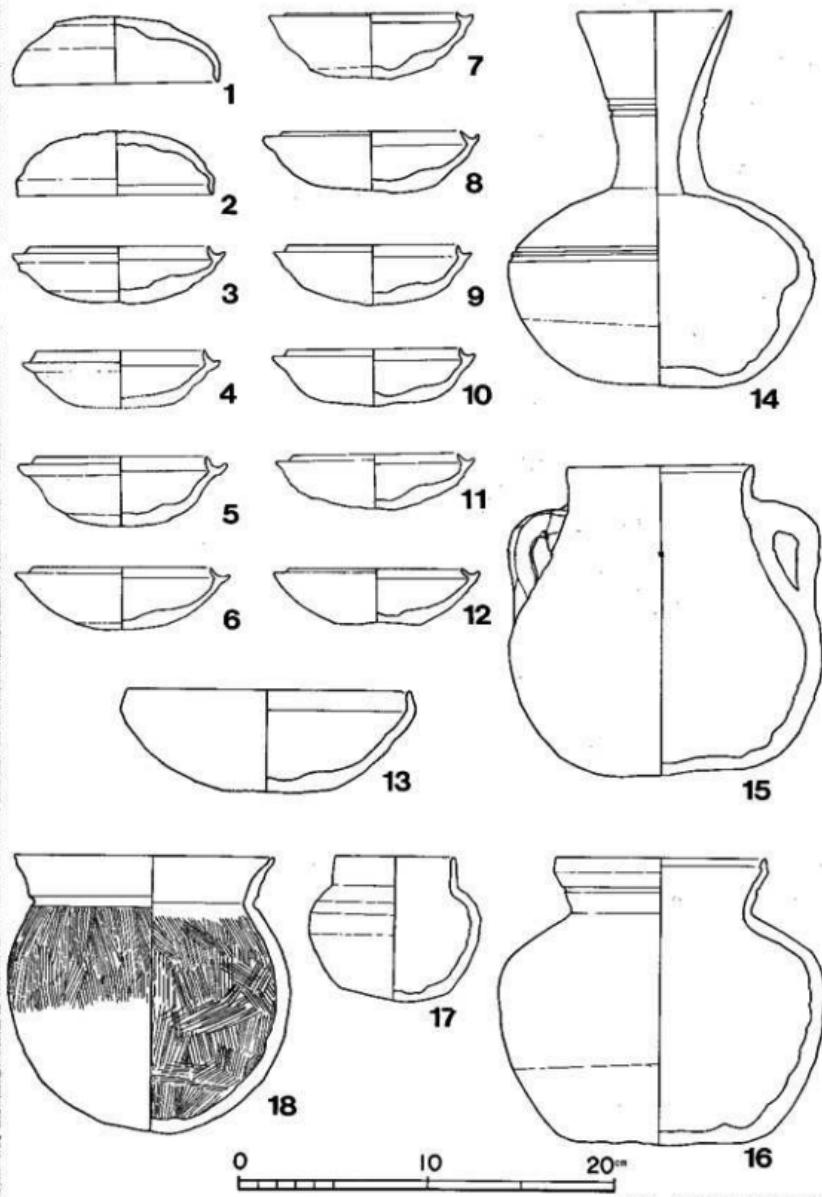
本古墳营造の時期については、玄室、差道部より検出された各群の遺物が同一の時期形成に伴なうものであり、低い矮小化のめだつ环等が示す時期、すなわち7世紀前葉と考えられ、3被葬者が、相前後して石室内に埋葬されたと推定できた。

小結 B-3号古墳西組はB-2号古墳東組と重複しており、本墳脇部の盛土状況を精査すると、土器形式上に現われない築造時期の差を知ることができた。すなわち、本古墳築成に伴なう陥没が、後にB-2号古墳構築の際、盛土により埋められていることが明確し、B-3号古墳からB-2号古墳へという古墳築造順序が決定された。同様に、B-4号古墳も本古墳東脇部を削除していることから、本古墳築造以後にそれが構築されたものであることが理解され、また当初本古墳前庭部で終了した墓道が、のちB-4号古墳築造に伴ない東方へ分岐延長されたことが知られ、それを裏づけている。B-3号古墳は、B支群東半部を占地し、その位置関係からみて支群西半部基幹道に接して築造されたB-1号古墳より後に築造されたものであり、結果B支群4基の内、第2次營造に係るものであることが理解された。

(山沢義貴)

(第B-3号古墳・石室平面図)





第B—3号古墓·遗物实测图

第 D-3 号古墳の調査

D-3号古墳は、截頭方錐台基の上に埋葬施設である方丘をのせた方形墳であり、木棺直葬を内部主体とし A-3号古墳と同一の構造を持つ。

位置 本古墳は、猿栗古墳群D支群に所属し、D支群東端部に位置する。西方のD-2号古墳の後背部に築造され、西北方のE-3号古墳と裾を接している。

墳丘 調査前現丘は東西径10.6米、南北径10.4米、墳丘高4.5米の円墳と考えられたが、後述の堆積土や流出土を除去した結果、凹隅が正しく東西南北を指し、西、南隅に張り出しを持つ截頭方錐台基上に方丘をせた半面方形の古墳であることが判明した。本古墳の西北方に隣接して存在するE-3号古墳橋塚の際、西北辺縁の大半が削土され現在截頭方錐台基の正確な規模を明らかにしないが、復原すれば各辺10.8米を測る方形であり、西南、西北辺縁より上に山高1.60米、4.65米を測る張り出しが各々東南、西南方に伸び注意を引いた。台基高は東南より西北に沈む地形に影響され東南辺0.55米、西北辺1.65米と差異を示し、張り出し部は、西隅が40厘米、南隅部40厘米と比較的低い。台基の形状については、堆山を一辺10.8米の方形で割し、中央高1.40米の地山台基を作り上部に明茶褐色上型25厘米を水平に積層している。西南両張り出し部とも黄褐色砂疊地山層の掘り残しで形成されたものであり、盛土は全く行なわれていないことが知られた。

上部方丘は、後世の封土流出の激しさに伴ない直面石積最下段の一部を留める以外その大半を失っており規模を確定しえないが、京北・西南辺5.30米、東南・

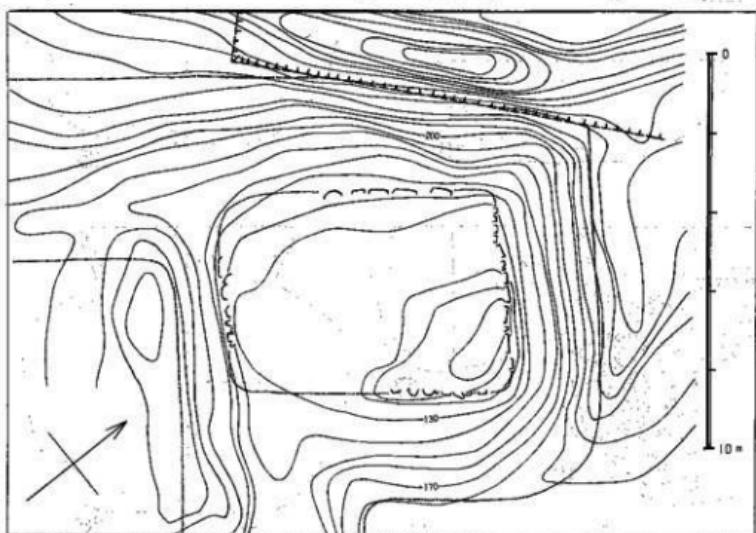
西北辺7.40米の長方形であったと想定できる。現在方丘高10厘米を測るが頂部55厘米が流出していることが知られ、復原高1.25米と想定できる。上部方丘の形成は台基上面より店鋪角土層20厘米をレンズ状に露出しており、以上は現存せず不明であるが方丘上部は平坦水平に敷えられたと推定できた。垂直石積はA-3号古墳の所見とはほぼ等しいが石材は若干大きく、頂高は7~8段積み上げ1.35米高的方丘上面まで及んだと想定できる。台基側面調査の結果、周濠・巻石等の設置は認められなかった。

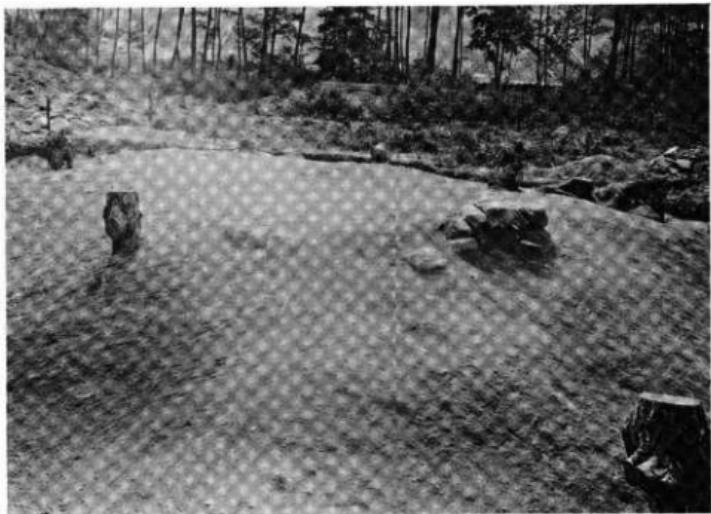
埋葬構造 調査以前より、石材の露出、被覆層等が認められないため、木棺直葬様と考え、流山堆積土を除去し上部方面より台基岬部まで精査を重ねたが埋葬構造は検出されなかった。調査最終時方丘・台基断面を取ったが被覆鉢遺構の存在は認められず、前記の如く上部方丘55厘米消失平夷の際、木棺直葬構造も流失したものと想定された。

遺物 本古墳調査時に検出された遺物は後世の擾乱堆積土層内の埴輪・瓦質土器片若干数であり、本古墳調査時に係る遺物は全く認められなかった。

小結 D-3号古墳は、截頭方錐台基とその上部による埋葬施設である方丘より構成し、木棺直葬を埋葬形態とするなどA-3号古墳と類似する。その上D支群3基中最奥部に位置し支群中最も遅れて構築されたものであり、築造時期についてはA-3号古墳と同様7世紀中葉をあてることが妥当と考えられる。

(黒崎尚)





(第D—3号古墳・全景)



(第D—3号古墳・埴丘部)

第 C-1号古墳の調査

C-1号古墳は西向きに開口し、東西に主軸を置いた四袖式の横穴式石室を持つ円墳である。

位置 本古墳は、今回発掘調査した古墳群の京端に位置する。東西に主軸を持つことなどから、B支群と区別され、一群をつくりC支群をたてた。

墳丘 墳丘の規模は南北径14.6米、東西復原径14.3米をはかり、墳丘高は南から北、東から西へ沈む地形に影響され京泡1.17米、西詰3.32米、南側82厘米、北詰2.12米とかなりの差異を示す円墳である。後世の堆積土を除去した結果、南側墳丘裾部は後世の擾乱、京堀部は道路のため裾部は破壊されていたが、旧規は墳丘径15.4米、正面高3.65米をはかることが判明した。墳丘の形成は東から西へ池山が傾斜していることから旧地表も同様であったと考えられ、その地形を基底とし、北では地山を長さ1メートル、深さ10厘米を削り、南側に中央基底を作り、レンズ状に暗褐色土層・明茶褐色土層・茶褐色土層を積層した後、全面に暗褐色土層でもって被覆していることが知られた。墳丘裾部を調査した結果、周濠・葺石・埴輪等の設置はなかった

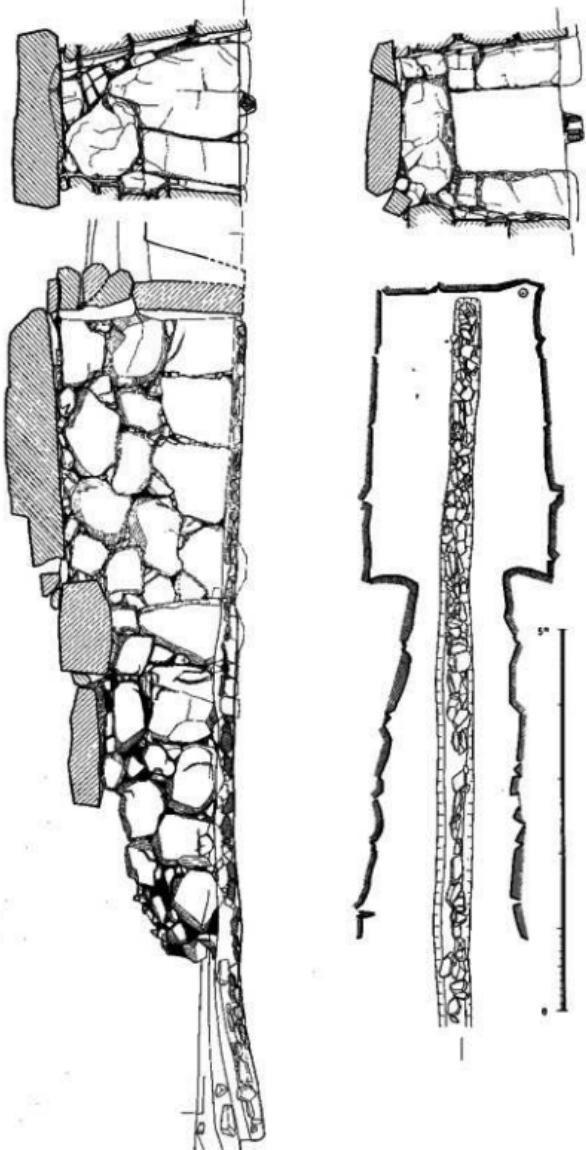
ことが知られた。

掘方 本古墳の内部主体たる横穴式石室は、東から西に下る傾斜地に東西に主軸を置き掘穿された掘方内に营造されている。この掘方は傾斜地に高所に向って、上縁京泡9.75米、高さ最奥部で1.04米をはかるよう作られたことが知られる。下底部は京泡9.05米、南北3.90米であり、奥壁部と済門部との下底部のレベル差は済門部で10厘米低く傾斜を示している。石室は斜面に穿たれた掘方の南へ少しよせて築構されており、且つ掘方内に玄室・談道とも造作されていたものと考えることができる。

石室 本古墳の内部主体たる石室は、西に開口する四袖式横穴式石室であり、調査前すでに開口し談道の天井石の一部は除去されていた。石室の全長8.68メートル、玄室長3.08メートル、巾奥壁で2.03メートル、玄門近くで2.37メートルと広がり、高さ2.4~2.1メートルと奥壁から玄門へと低くなっている。談道は長4.88メートル、巾玄門で1.7メートル、済門2.1メートルと広がり、高さ1.5メートル、右袖の出56軒、左袖の出64軒をはかる。

(第C-1号古墳・天井石)





（第C—1号古墳・実測図）

玄室において、奥壁は下段には巨石を配し、二段積で、両側壁は三段積みしており、奥壁の一段目と両側壁の二段目の上面がそろうように架構されている。奥壁は垂直に架構されているが、両側壁は少しの持ち上がりがみられ、天井石は長辺を主軸に平行して一石配する構法をとっている。

渓道は両側壁とも二段積みしている。天井石は長辺を主軸に直交させて現在二石配されているが、本来は三石配されていたと考えられる。石室中央部にみられる排水溝は奥壁内面より広く7種の位置の地山から巾30cm~50cmの上肩、深さ8cm~33cmのU字形に長さ10mの溝を掘削し、その内に平石を掘方の両側に立て、平石でふたをしている。排水溝は渓門外前方1.39m外まで続いている。石室外までおよんでいたことが知られる。溝の下底レベル差は西端で73cmで玄室内が高いことが知られる。床面は排水溝をおおい覆土し水平にしてつくられていた。

遺物出土状況 石室内は擾乱されており、擾乱層内より陶質土器・埴質土器・小像が出土し、床面の旧位置には奥壁右側に陶質土器の蓋1個、石室奥中央部に金環1点・鉄製釘3本がみられた。

遺物 床面旧位置からは7世紀中葉の宝珠形つまみを有する口徑10cmの环の蓋1個、 0.7×0.24 cmの楕円の断面を持つ青銅芯で径2.7cmの金環1点、鉄製釘3本。擾乱層から7世紀前半の陶質土器の环の身4個体、蓋6個体、高环3個体、吉野村長頸瓶2個体、短頸壺2個体、壺1個体、埴質土器の壺2個体分の破片が出土した。又同じ擾乱層内より中世の瓦質土器の高台付浅皿の数多くの後片と青銅製の小仏像が出土した。

被葬者と時期 石室内には7世紀前半と中葉の二時期にわたる陶質土器が出土していることから、少なくとも2体以上恐らく数遺体が埋葬されたと考えることができるが、擾乱が甚しく、具体的に被葬者の数を示すことはできない。

小結 本古墳は、石室内の遺物中陶質土器が7世紀前半と中葉の二時期を示し、他の古墳と同様ではあったが、他の横穴式石室の主軸と異り、石室の規模、石材も相異し、また、排水溝を有すること、埴丘の封土より6世紀後半のものとみられる陶質土器の环の一部が出土していることから考えて、6世紀後半以降に築造され、今回発掘調査した古墳群の中で最古の古墳の一であろうと考えられた。

(中井貞夫)

(第C-1号古墳・石室)



第B-4号古墳の調査

B-4号古墳は、南西に開口した小形の横穴式石室を内部主体とする小円墳である。

位置 本古墳はB支群の東方最奥部の高所に位置しB-3号古墳の東裾部に内部主体を配する。

墳丘 本古墳は発掘調査前、封土の流出、東側の斜面からの流積土により、古墳としての微証がなかった。こうした状態のため、発掘調査においても全く封土を知ることはできず墳丘の旧縁をうかがうことは困難ではあったが、掘方が全長3.25米をはかり、石室後元高が1メートル前後と推定され、加えて、地山が石室主軸の東側で掘方の東縁上肩から下り傾斜を呈し、2.40メートルで終っている事実があることなどから、もし旧地表を墳丘の形成に利用したと考えるならば墳丘は径5メートル、墳高1.20メートル前後を測る小規模な円形墳かと思われた。本墳の封土は全て流出していたが、西半分はB-3号古墳の墳丘を利用しておらず、墳丘推定地全域を精査した結果墳丘には周濠・葺石・埴輪等の設置はなかったものと考えられた。

掘方 本古墳の内部主体なる横穴式石室は、B-3

号古墳の東側墳丘裾部にあって南北に主軸を置き、南に開口した長方形の掘方内に营造されている。この掘方は、その上縁において東西2メートル、南北3.25メートルをはかる。深さは最深部で50センチをはかる。下底部は東西1.50メートル、南北2.50メートルで平底である。

右側壁内面より83センチ外方に掘方東縁上肩があり、側壁最下底石材底面と同レベル、内へ38センチの地に掘方東縁下底がある。左側壁内面より63センチ外方に掘方西縁上肩があり、側壁最下底石材底面と同レベル、内へ35センチの地に掘方西縁下底がある。奥壁内面より54センチ外方に掘方北縁上肩があり、奥壁最下底石材底面と同レベル、内へ35センチの地に掘方北縁下底がある。従って、B-3号古墳の墳丘裾部に掘穿された掘方の北と西によせて石室を構成しており、且つ掘方内に石室の全てが造作されていたと考えられる。

石室 本古墳の埋葬主体たる石室は南西に開口する横穴式石室であり、破壊がはなはだしく天井石はすでに遺存せず、奥壁と左右両壁は大部分が最下底石しか残存していない。現存する石室の規模は、二段積みの

(第B-4号古墳・石室)



石室で全長2.47米、巾は奥壁部で60厘米、中央部で78厘米、入口部で59厘米をはかる中ぶくらみのプランをもち、高さは床面より57厘米をはかる。石室は奥壁、両側壁に大きな石材を立てて横長に設置して最下段とし、二段目は小石を小口積みし上面を盛り天井石を架構しやすくする。棺高より少し高い位置に天井石の下底部をもってくためであろう。床面は平石を敷詰め、その間を小石で隙間なく詰めて水平な床面を形成している。

本石室の特徴は、渓道部が省略されて、玄武のみ構築されていることであって、この石室も全長2.50米、巾0.78米～0.58米、高さ0.60米のように一棺を埋葬することのみを考慮に入れて構築されており、横穴式石室としての本的な機能を失いつつあるかの如くである。渓道部は省略されてはいるが、横穴式石室として

の意識のものと構築されたらしく、石室南側に埋方は存在していたが、その側方内には壁を作るような石材の設置された痕跡は見られず、石室外南側に2個の石材が置かれており、それを横通閉塞石として用いていたかもしれないと考えられるにとどまる。いずれにせよ、一棺埋葬用の簡略化した横穴式石室の一形と考えられるであろう。

被葬者と遺物と時期 本古墳は一棺埋葬用の横穴式石室であるので、当然被葬者は一人である。遺物は何一つなく時期は明確にし得ないが、B-3号古墳より新しい事実を知り得たにとどまる。

小結 B-4号古墳は一棺埋葬用の簡略化された横穴式石室をB-3号古墳の東墳丘端部に持つとはいえた独立し、B古墳群中後期に属する。 (中井貞大)

解

孤塚古墳群は滋賀県甲賀郡甲西町大字針小字孤塚に所在し、現集落の背後0.7軒の地、針川の京岸の平坦地に當造された今21基よりなる後期古墳群である。21基の古墳は、幹線路、支線路により7支群に区分され各群平均3～4基より構成されており、各支群最も奥深乃至は支線路に面する2塙の背後に所在する古墳は、いずれも木棺直葬の方墳や小石室を具えるものであり横穴式石室をもつ通有な円墳とその間に極めて明瞭な対照を示した。

そうした内容を表示すれば下表の如くであるが今詳翻に検討すれば、まず、発掘調査したA-1号古墳、B-2・3号古墳C-1号古墳はいづれも通有な横穴式石室を構えた円墳であり、6世紀末に築造されるもの、7世紀前葉に築造されるものがあり、各支群間の横穴式石室をもつ円墳は1世代1墳と成層的に成立しており、内容はいずれも家族墓とするに相応しく最小限3

名以上を被葬していることが考えられる。一方追葬については必ずしも6世紀末築造の石室墳が7世紀前葉のそれよりも早く追葬を切り上げている事実ではなく、両石室墳の被葬者との類縁関係に応じて追葬が行なわれていた事実を示している。たゞ横穴式石室墳の累代的成層的形成の事実は家長の死を哭喪とするか、それを予測しての骨送と思われる、その故に隣接して石室墳が誕生するものと考えられた。追葬者はこうした家長との類縁者であって本人を中心前後各2世代を含む場合が「分考」され、それがため追葬時期が各墳それぞれに異なる結果を生むに至ったのであろう。さて、木棺を直葬する方墳、乃至は小石室を具えた古墳はいづれも7世紀中葉の築造に係るものと推察されるが、こうした古墳は横穴式石室のものと一墳多時、家族墓、追葬という性格と異り、一墳一時、個人墓、合葬という特色ある内容をもっている。こうした内容をもつ古墳

(孤塚古墳群・編年表)

支群名 種別	A支群	B支群	C支群	D支群	E支群	F支群	G支群	墳丘・他	時 期
横穴式石室	A-1	B-1	C-1	D-1	E-1	F-1	G-1	円墳・家族墓 多葬墓	築造 6世紀末から 7世紀前葉 追葬終了 7世紀前葉から中葉まで
	A-2	B-2		D-2	E-2	F-2	G-2		
		B-3					G-3		
小石室 木棺直葬	A-3	B-4		D-3	E-3	F-3	G-4	？・单葬墓 方墳・合葬墓	7世紀中葉
備考		B-3は一部消滅 B-2より古いか	D-3はE-3は E-3よりD-3より新かい		F-3	G-4			
				未定	未定	未定			

は各支群にに基づつ見られるのであるから、追って家族類縁者を追尋する計画ではなく。当初よりこうした家系乃至は夫婦・類縁者合葬を目的とし意識的、計画的に造墓したことを見せており、7世紀中葉における造墓意識の大きな変化がここに指摘しうることとなるのである。しかも、こうした葬儀が各支群に基づつであり2基を成層的に形成していない事実は7世紀中葉の僅かな時間後、古墳造営の風が各家族=各支群ごとに終焉した事実を暗示していると見ることができ、ここに、6世紀末乃至は7世紀初頭における造葬を意識した横穴式石室墓の成立と展開、7世紀中葉前半における追葬を取った木棺直葬への移行（石室内追葬はづく）、ついで7世紀中葉中ばごろの古墳造営の終焉という3段階を等しく狐塚古墳群各支群が経過したことを見出しうるのである。

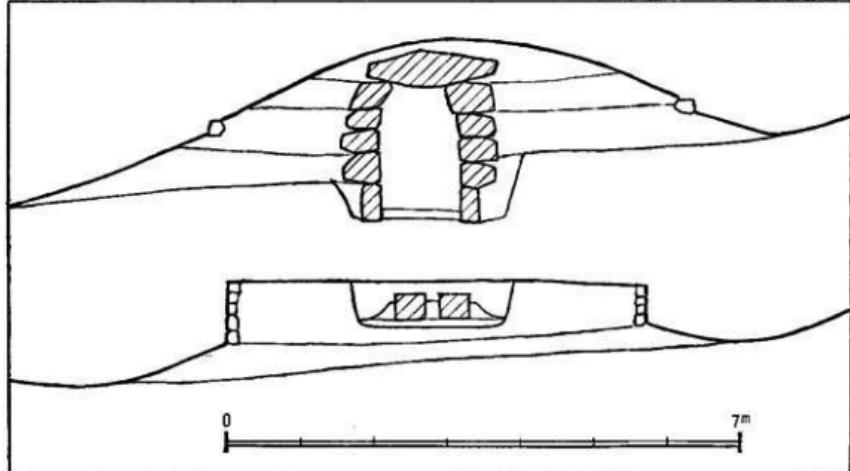
本例と相似した場合は、野洲川をへだてた対岸、甲西町芦原寺の西はづれ竜王山古墳群にも指摘され5基!群山尾根を兎にする1基を除く外すれば下降する1尾根上に4機穴式石室墳が直列し最高所に存する第1号古墳のみは小石室・單葬墓であった。しかし甲賀郡水口町波瀬平古墳群にはこうした造葬を考えない古墳の成立ではなく、一見相似した薄生郡東部の木棺直葬墳も数多い追葬が指摘され異った性格を示しており、他に現在そうした展開を顯示する例は乏しい。ただ県外ならば大阪府南河内郡や奈良県などに同様な追葬を意識しない横穴式石室墓や小石室が指摘されるが、群集墳における事例は乏しく今後に期して候所が大である。

恐らく、造墓意識の変化と造営の終焉は狐塚古墳群の場合各支群=各家族をおおう形で見られ、そこに社会的背景、起因のあることを思われる所以である。

いづれにせよ、狐塚古墳群は境界を可能とする横穴式石室をもつ円墳の營造後、終焉を飾る特徴的な單葬・合葬を内容とする木棺直葬の方形墳、小石室をもつ小円墳が成立する。この二者を復原的に図示すれば下図の通りであり、よくその性格の差を示している。木棺直葬の方形墳は截頭方錐状台基上に埋葬施設である方丘を被せる特徴あるものであって、從前類例少なく、よく被葬者の性格にもとづく造形であることが理解できる。こうした造型をもつ古墳の成立が仮説に成立したとは考えられず、本古墳群を特色づけるもの、ひいては原界の家族の往復をも暗示するといえよう。

本古墳群21基中7基が今回辨認農道設置のため止むなくその盛土の対象となり、事前発掘調査を実施したが、その成果の既定性に鑑み4基を移築しその公開を行なった。辨認農道を迂回せしめ多大の経費を投じて直就石室に工法をかえ、埋没さけがたい7基についても発掘調査、一部移築を実施し、のち残存地域全般を緑地化する計画を立てられた。タキイ種苗株式会社に厚く謝意をのべるとともに、炎天下調査に従事された調査員諸氏、種々御協力を賜わった地元針区に謝辞をのべたいと思う。
(水野正好)

狐塚古墳群における二種の古墳



昭和43年3月15日 印 刷
昭和43年3月30日 発 行

甲賀郡甲西町
孤栗古墳群発掘調査報告書

発行者 滋賀県教育委員会
印刷者 大津紙業写真印刷株式会社